



国立研究開発法人
水産研究・教育機構

プレスリリース

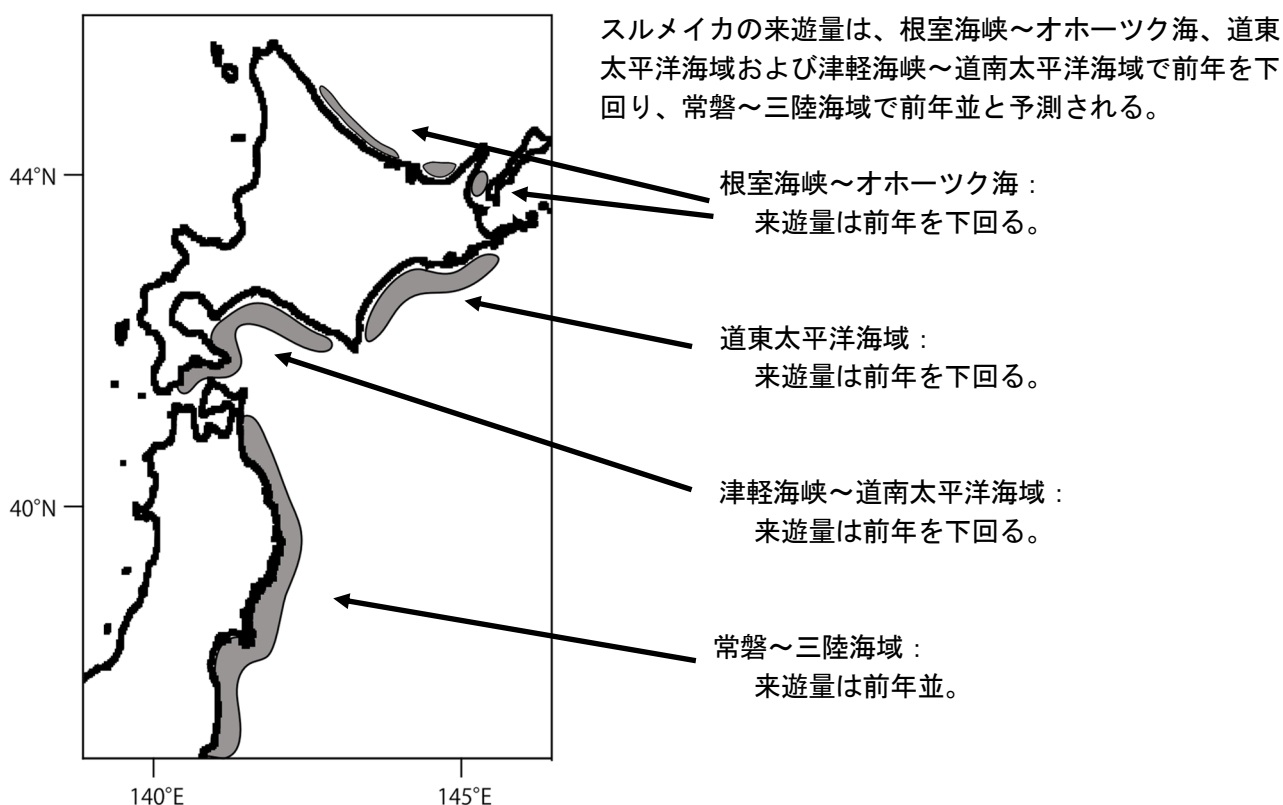
2026年9月30日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2026年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2026年10月～12月)のポイント



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：浮魚資源部（横浜）大島、松井、境
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2026 年度 第 2 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2026年10月～12月）の概要

1. 道東太平洋海域（小型いか釣り、底びき網）

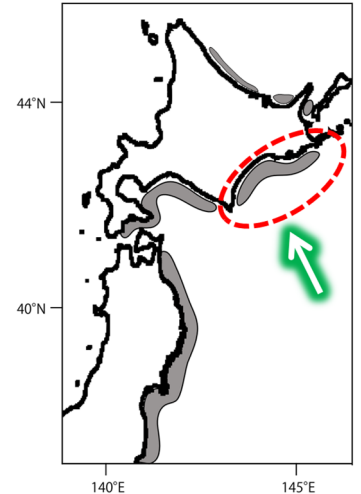
(1) 来遊量：1980年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、調査結果が不良であり、来遊量は前年を下回ると予測される。

(2) 漁期・漁場：太平洋沖合域を北上する群れが主体。

対象期間を通じて漁場となる。



2. 根室海峡～オホーツク海（小型いか釣り、底びき網、定置網、刺し網）

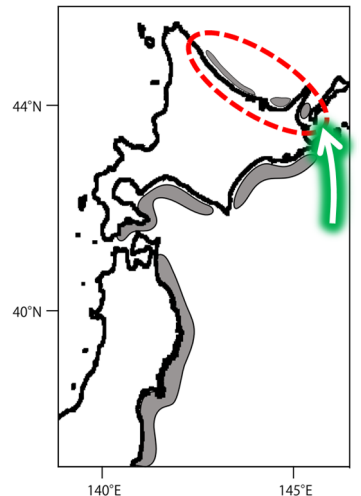
(1) 来遊量：1980年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、調査結果が不良であり、来遊量は前年を下回ると予測される。

(2) 漁期・漁場：太平洋沖合域を北上する群れが主体。

オホーツク海沿岸の10月の水温は前年並と予測されているため、漁期は前年と同様に11月までとなる。



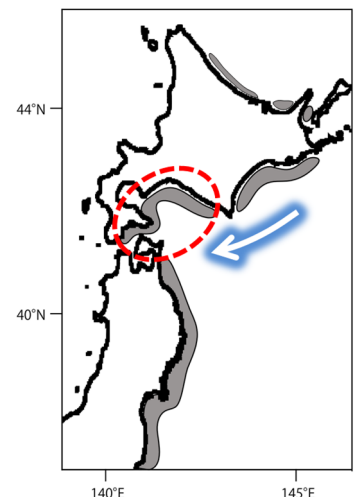
3. 津軽海峡～道南太平洋海域（小型いか釣り、定置網）

(1) 来遊量：1980年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均並であった。

本年（2026年）は、小型いか釣り漁船での漁獲が前年を下回り、調査結果も不良であることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

(2) 漁期・漁場：津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群れと道東太平洋海域から南下する群れが主体。対象期間を通じて漁場となる。



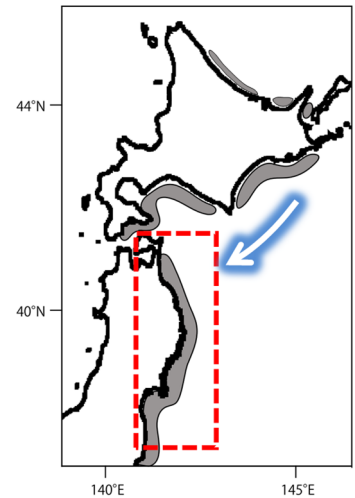
4. 常磐～三陸海域（小型いか釣り、小型底びき網、沖合底びき網、まき網）

(1) 来遊量：1980年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均並であった。

本年（2026年）は、現状の漁獲状況は前年ほどではないものの
調査結果は良好であり、来遊量は前年並と予測される。

(2) 漁期・漁場：常磐～三陸海域に分布する群れと道東太平洋海域から南下する群れが主体。対象期間を通じて漁場となる。



I 予報の説明

国立研究開発法人 水産研究・教育機構は、参画道県の試験研究機関および漁業情報サービスセンターとともに、水産庁の委託を受けてスルメイカの長期漁況予報を実施している。本資料では、太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量予測について示した。

予測には、2026年8月下旬～9月上旬に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査¹⁾の結果（図1～3；以降、いか釣り調査と総称する）、および8月（一部9月を含む）の漁況経過（表1）を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。

その結果、2026年10月～12月の来遊量は、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域、津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回ると予想され、常磐～三陸海域では前年並と予測される。

なお、前年（2025年）の10月～12月の漁獲量は、小型いか釣りの操業停止および底びき網や定置網において漁獲を抑制した操業が行われた。2025年10～12月の漁獲量は、道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域はその前年までの5年間（2020年～2024年）の平均値を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域および常磐～三陸海域の漁獲量は、2020～2024年の平均並であった。

¹⁾ 北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。

1. 道東太平洋海域（小型いか釣り、沖合底びき網）

本海域で漁獲対象となるスルメイカ資源は、主に太平洋沖合域を北上する群れで構成される。道東太平洋海域（北緯42度以北、東経143度以東）におけるいか釣り調査の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は、前年を下回った（図1、2）。道東主要港では8月に水揚げがなく、前年の漁獲量を下回った（表1）。8月上旬の道東沿岸域には水温の低い冷水域が分布しており²⁾、スルメイカの来遊が妨げられていた可能性があるが、8月下旬以降は解消されている（図4）。したがって、道東沿岸域への来遊の条件は良いと考えられるものの、いか釣り調査の平均CPUEは前年を下回っていることから、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると考えられる。

2. 根室海峡～オホーツク海域（小型いか釣り、沖合底びき網、定置網、刺し網）

本海域で漁獲対象となるスルメイカ資源は、主に太平洋沖合域を北上する群れが構成される。釧路以東（東経144度40分以東）におけるいか釣り調査の平均CPUEは漁獲が無かったため、前年を下回った（図1、2）。釧路～羅臼海域では8月に水揚げがなかった（表1）。表面水温が低いと、太平洋からオホーツク海への来遊に不利に働くと考えられるが、北方四島周辺の太平洋側の海域における8月上旬以降の平均海表面水温²⁾は前年並で推移しており、10月までの水温（図5）³⁾も前年並と予測されている。このため、スルメイカの太平洋からオホーツク海へ回遊する条件は前年と変わらないと考えられる。しかし、いか釣り調査の結果から太平洋沖合を北上する群の来遊量は前年を下回ると予想されることから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を下回ると予測される。オホーツク海沿岸の10月の予測水温は前年並であるため（図5）、漁期は前年と同様の11月までと予測される。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（小型いか釣り、定置網）

本海域で漁獲対象となるスルメイカ資源は、主に津軽海峡～道南太平洋海域（北緯41度以北、東経143度以

西) に分布する群れと道東太平洋海域から南下する群れで構成される。津軽海峡～道南太平洋海域におけるいか釣り調査の平均 CPUE は前年を下回った (図 1、2)。函館港における 8 月の小型いか釣り船 CPUE (1 日 1 隻当たり水揚量) は前年並であり、9 月上旬の小型いか釣り船 CPUE は前年を下回った⁴⁾ (表 1)。このため、津軽海峡～道南太平洋海域における群れの分布量は前年を下回ると考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されている。以上の結果から、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される。

4. 常磐～三陸海域 (小型いか釣り、小型底びき網、沖合底びき網、定置網、まき網)

本海域で漁獲対象となるスルメイカ資源は、主に常磐～三陸海域に分布する群れと道東太平洋海域から南下する群れで構成される。三陸海域 (北緯41度以南、東経143度以西) におけるいか釣り調査の CPUE は調査地点間での差が大きいものの、その平均値は前年を上回った (図1、2)。

青森県、宮城県、福島県の主要港における9月上旬の沖合底びき網による水揚量^{5、6、7)}は前年を下回り、岩手県の主要港における水揚量⁸⁾は前年並であった (表1)。ただし、小型底びき網、沖合底びき網においては操業ごとの水揚量に上限を設け、漁獲を抑制した操業が行われているため、水揚量が前年下回った場合であっても、必ずしも本海域に分布する群れの量が前年を下回ることを示すものではない点に留意する必要がある。青森県および岩手県の主要港における8月の小型いか釣り船 CPUE は前年を下回ったものの、八戸港における9月上旬の小型いか釣り船 CPUE は前年並であった⁵⁾。

前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されており、現状の漁獲状況は前年ほどではないものの、常磐～三陸海域における調査結果は良好であり、常磐～三陸海域への来遊量全体としては前年並と予測される。

³²⁾ 国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム (FRA-ROMSII) による予測水温 (<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)

²³⁾ 気象庁の札幌管区気象台が公表している日別海域平均海面水温 (<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/series/engan/engan.html>)

⁴⁾ 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ市況情報を基に集計。

⁵⁾ 八戸市水産事務所 (https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/suisanjimusho/1_1/1635.html) による水揚げ概況を基に集計。

⁶⁾ みやぎ水産 NAVI (https://suisan-navi.pref.miyagi.jp/mizuage_top) による水揚げデータを基に集計。

⁷⁾ 相馬双葉漁業協同組合 (<https://www.soso-gyokyo.jp/market>) による市況情報を基に集計。

⁸⁾ 岩手大漁ナビ (<https://www.suigi.pref.iwate.jp/>) による市況データを基に集計。

II 調査結果

太平洋側の3道県によるいか釣り調査 (8月下旬～9月上旬に実施) により、太平洋におけるスルメイカの分布状況を調べた (図1)。全29調査点のうち有漁点は8点 (28%) であり、前年の全30調査点中13点 (43%) と比べて有漁点割合は低下した。調査海域全体の平均 CPUE は4.16尾であり、前年 (0.39尾) を上回った (図1、2)。

海域別に見ると、道東太平洋海域では0.03尾であり、前年 (0.37尾) を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域では0.14尾であり、前年 (0.95尾) を下回った。三陸海域では15.00尾であり、前年 (0.24尾) を上回った。

漁獲されたスルメイカの外套背長は、道東太平洋海域では最頻値が12～13cmにあり、前年（15cm）より小さかった（図3）。三陸海域は最頻値が18～19cmにあり、前年（13cm）より大きかった。津軽海峡～道南太平洋海域では漁獲尾数が少なく、明瞭な最頻値が認められなかったため、前年と外套背長組成の比較ができない。

Ⅲ 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2025年は2.4万トンであった（図6）。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少して推移し、2025年は0.8万トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。

2025年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は3.9千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では2.2千トン、道東太平洋海域では0.1千トン、根室海峡～オホーツク海では0.1千トンであった（図7）。また、千葉県以南の海域での漁獲量は38トンであった。2020年～2024年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では98%、津軽海峡～道南太平洋海域では106%、道東太平洋海域では18%、根室海峡～オホーツク海では24%、千葉県以南の海域では115%であった。

2026年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は2.8千トンで、前年（5.5千トン）を下回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では2.8千トンで、前年（4.0千トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港の水揚量は一部集計中であるが、現状では20トンで、前年（1.3千トン）を下回った。道東太平洋海域の主要港では0トンで前年を下回った（前年は110トン）。根室海峡～オホーツク海では0トンで、前年を下回った（前年は0.1トン）。千葉県以南の主要港では50トンで、前年（66トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図6、図7を含めた漁獲量は全て推定値である。

²⁾ 水揚量は単純積み上げた数値。

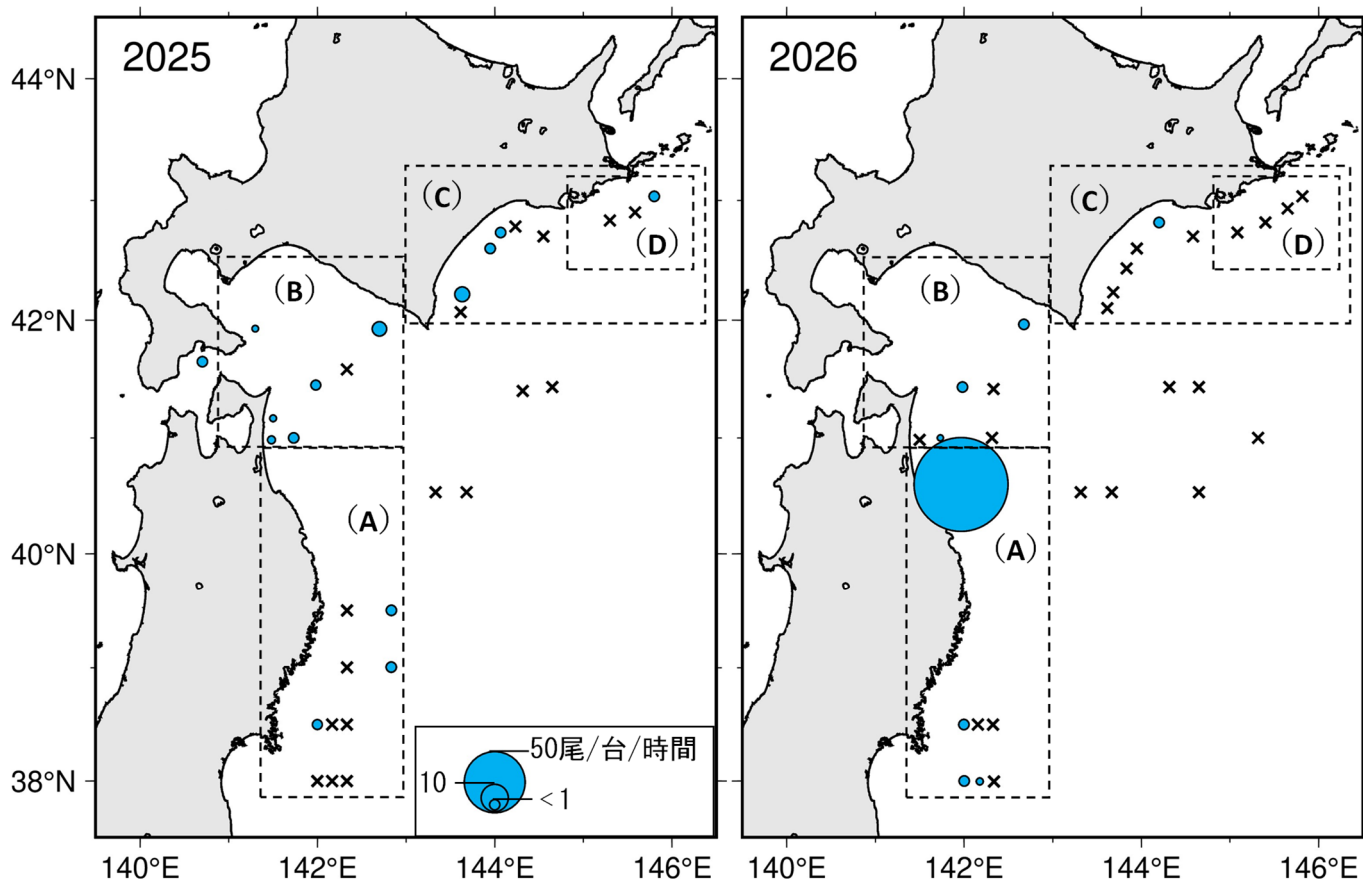


図1. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2025年と2026年の8月～9月のいか釣り調査によるスルメイカのCPUEの分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸海域、

（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および（D）釧路以東海域であり、各海域（Dは根室海峡～オホーツク海域）の来遊量予測の根拠として用いた調査海域を示す

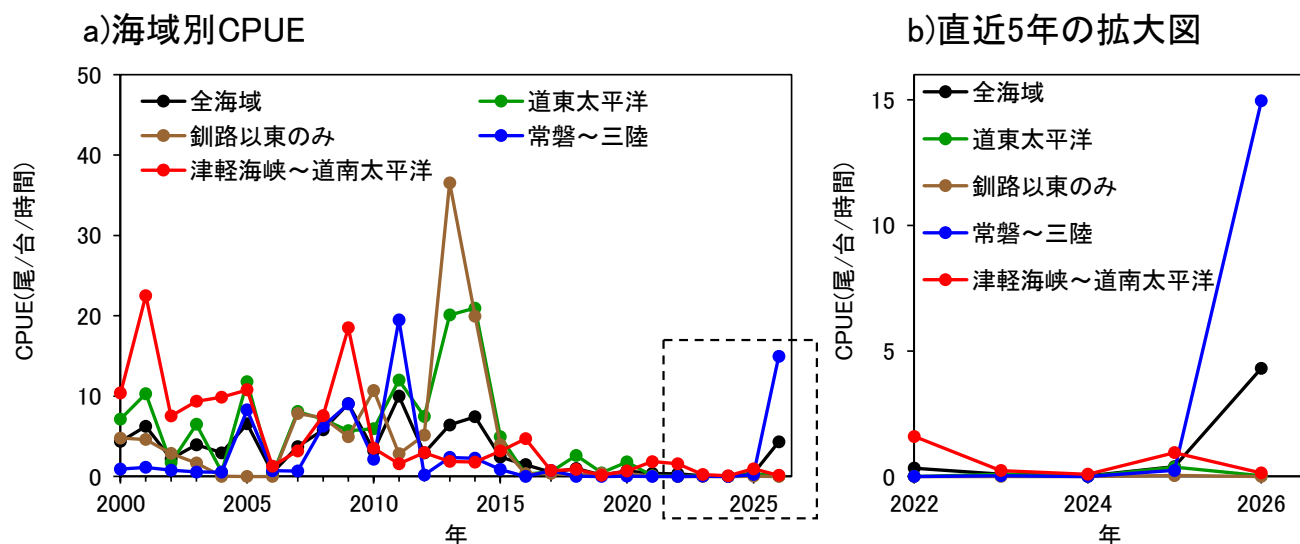


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移
直近5年（左図aの破線で囲まれた年）を拡大したものを右図bで示した。

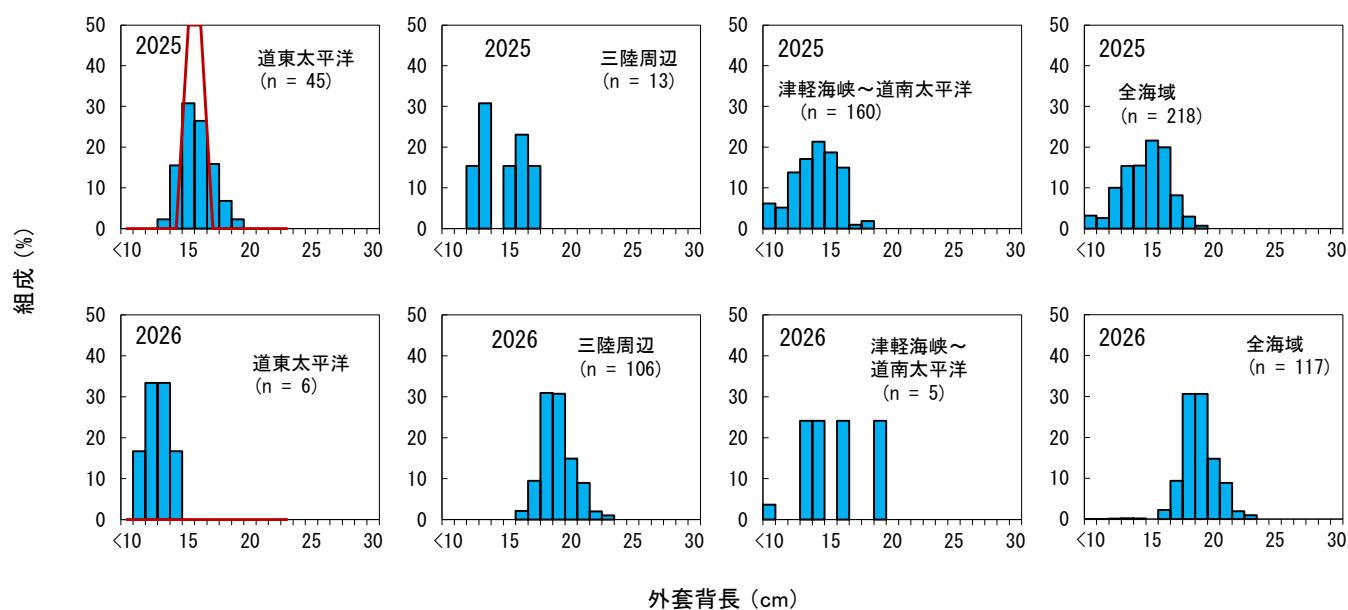


図3. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果

各海域および全海域の外套背長組成は各調査点の組成をCPUEで重み付け平均して作成している

nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

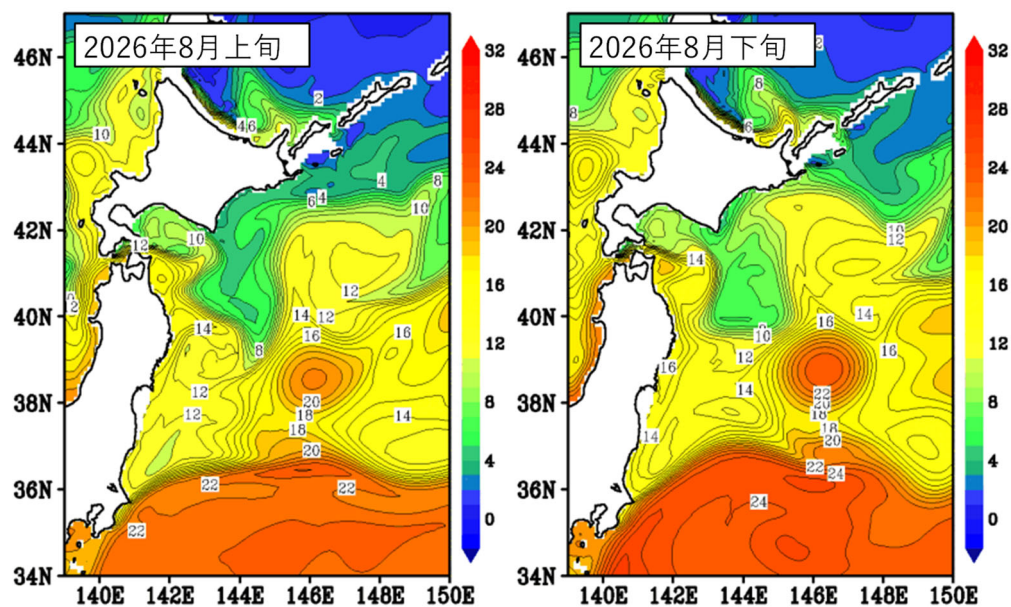


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2026年の8月上旬と下旬の深度50mにおける予測水温
色および等温線は表面水温（℃）を示し、右側のカラースケールに対応している
深度50mはスルメイカの代表的な分布深度であり、2026年9月17日にHPより取得した

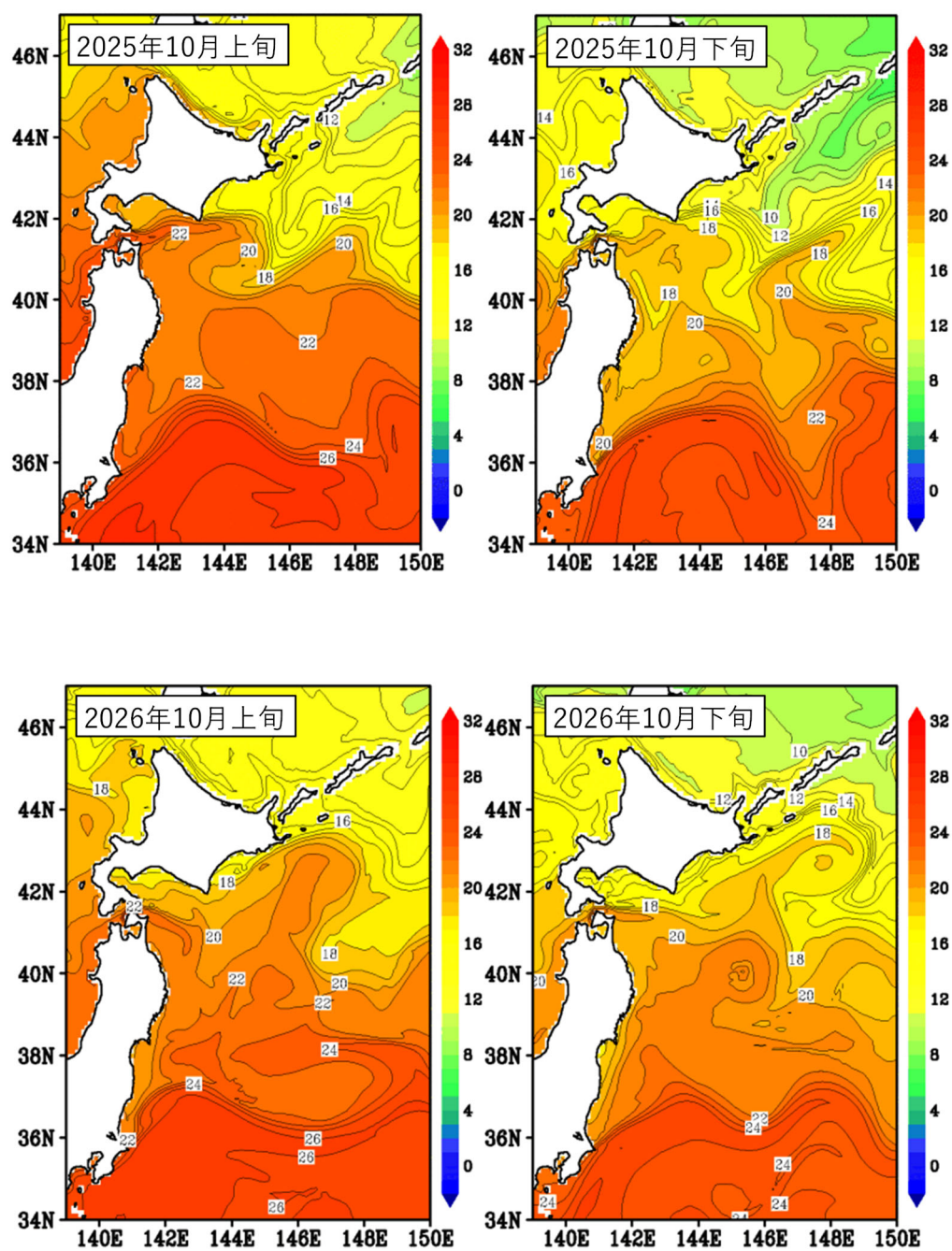


図5. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2025年、2026年の10月上旬と下旬の海表面水温色および等温線は表面水温（℃）を示し、右側のカラースケールに対応している
2026年は予測水温であり、2026年9月28日にHPより取得した

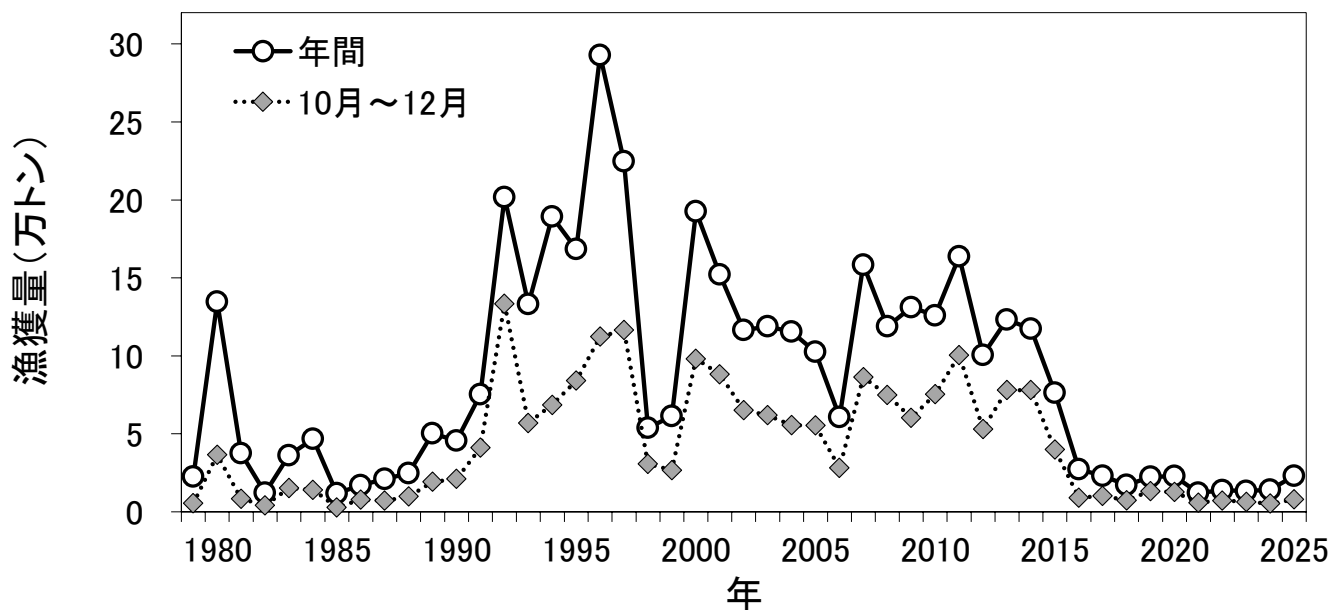


図6. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

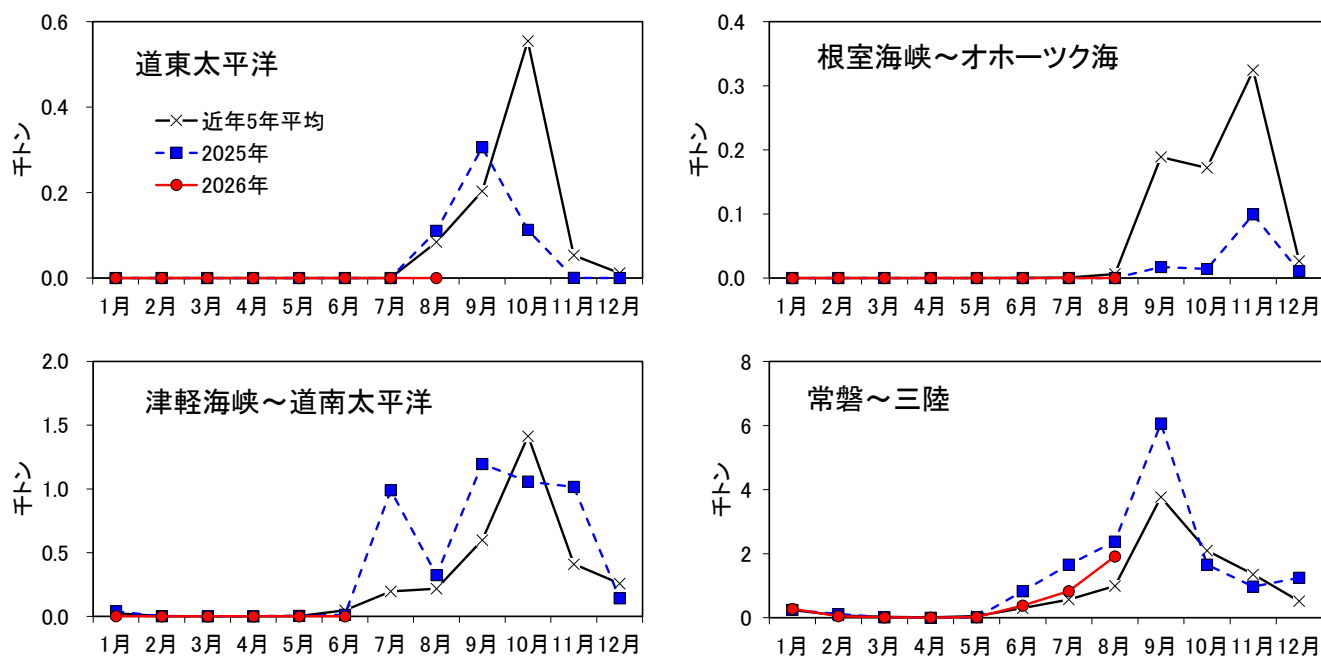


図7. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）

近年5年平均は2020年～2024年の平均

（小型いか釣り・沖合底びき網・小型底びき網・定置網・まき網・刺し網）

表1. 漁況経過（2026年7月～8月、一部9月・未集計・暫定・推定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	太平洋側の初水揚げは、9月15日（釧路港、沖合底びき網）であった。前年（花咲港で8月18日、釣り）より遅かった。 羅臼港では、9月15日時点で水揚げなし（前年は9月20日に釣りと定置網で初水揚げ）。
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚量は8.2トンで前年比79%、CPUEは前年比93%であった。漁業情報サービスセンターのスルメイカ市況情報によると函館港での釣りによる9月上旬の水揚量は1.2トンで前年比35%、CPUEは前年比37%であった。
青森	白糠港での釣りによる8月の水揚量は54.5トンで前年比28%、CPUEは前年比50%であった。 八戸港での釣りによる8月の水揚量は289.9トンで前年比67%、CPUEは前年比67%であった。 八戸港でのまき網による8月の水揚量は468.0トンで前年比114%であった。 八戸市水産事務所の水揚げ概況によると、八戸港における9月上旬のまき網による水揚量は2.8トン（前年は2.3トン）、沖合底びき網による水揚量は735.3トン（前年は1243.7トン）、小型底びき網による水揚量は9.5トン（前年は11.0トン）、釣りによる水揚量は192.9トン（前年は264.9トン）であり、釣りによるCPUEは前年比89%であった。なお、沖合底びき網では14トン/隻の漁獲上限を設けて操業が行われている。
岩手	岩手県主要港での釣りによる8月の水揚量は455.1トンで前年比74%、CPUEは前年比57%であった。定置網による8月の水揚量は40.5トンで前年比265%であった。また、いわて大漁ナビの市況データによると、9月上旬の沖合底びき網の水揚量は497.0トン（前年は435.9トン）、釣りによる水揚量は195.6トン（前年は222.6トン）、定置網による水揚量は12.7トン（前年は1.1トン）であった。なお、沖合底びき網では、2そうびきは15トン/ヶ統、かけまわしは7～8トン/隻の漁獲上限を設けて操業が行われている。
宮城	宮城県主要港での釣りによる8月の水揚量は2.2トンで前年比129%、CPUEは前年比143%であった。定置網による8月の水揚量は26.4トンで前年比484%であった。小型底びき網による8月の水揚量は95.0トンで前年比50%であった。また、みやぎ水産NAVIの水揚げデータによると、9月上旬の定置網による水揚量は7.5トン（前年は0.1トン）、石巻港への沖合底びき網による水揚量は200.3トン（前年は977.1トン）であり、小型底びき網による水揚量は4.4トン（前年は73.8トン）であった。なお、沖合底き網では1.7～2.5トン/隻、小型底びき網では1トン/隻の漁獲上限を設けて操業が行われている。
福島	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。相馬双葉漁業協同組合の市況情報によると、相馬原釜港での9月上旬の沖合底びき網の水揚量は38.6トン（前年は84.3トン）であった。なお、沖合底びき網では0.4トン/隻の漁獲上限を設けて操業が行われている。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	主要港での釣りによる8月の水揚量は90kgであった（前年は63kg）。
神奈川	三崎港での定置網による8月の水揚げは9kgであった（前年は1kg）。
静岡	仁科港での釣りによる8月の水揚量は4.2トンであった（前年は4.4トン）。
三重	奈屋浦港でのまき網による8月の水揚量は0.2トンであった（前年は14kg）。
和歌山	すさみ港での釣りによる8月の水揚量は42kgであった（前年は7.8トン）。
高知	主要港での釣りによる8月の水揚量は6.6トンであった（前年は4.8トン）。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	神奈川県水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	静岡県水産・海洋技術研究所
岩手県水産技術センター	三重県水産研究所
宮城県水産技術総合センター	和歌山県水産試験場
福島県水産資源研究所	高知県水産試験場
茨城県水産試験場	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
千葉県水産総合研究センター	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所